

人生の最終段階を迎える患者と家族の意思決定支援における一考察 ～MSWの視点から～

○大分大学医学部附属病院 嶋田 奈々

キーワード：人生の最終段階における医療、意思決定支援

1. はじめに

昨今、医療機能の分化も進み、患者・家族の医療の選択の自由化、意思決定支援の重要性が謳われている。

本研究では、人生の最終段階を迎える患者・家族のMSWにおける意思決定支援の重要性について実感した事例の報告を行いたい。

2. 倫理的配慮

本研究は、関係医療機関の詳細な情報及び患者・家族の個人情報をも匿名加工することにより患者が特定されないように配慮した。

3. 事例紹介

40代、末期癌のA氏は、両親・弟と4人暮らしをしている。以前は他県で一人暮らしをしていたが、今回の診断を元に帰省し、家族で生活を送る事となった。

4. 支援概要

インテーク面談において、自身のことについて多くは語らない性格であることや、病気のことについて調べる真面目な姿などA氏の人間像を捉えることができた。しかし、A氏自身の受容の過程を把握することまでは出来ていなかった。加えて、A氏は主訴として「自宅に帰って好きな時に好きなものを食べたい」という事を語られた。

A氏の主訴を踏まえ、家族へA氏の意思を代弁し、家族の希望をもとに在宅医療のイメージを持ってもらうための面接を重ねた。その後、両親の「息子の意思を尊重したい」という思いもあり、自宅退院を目指す事となった。点滴による栄養摂取など医療的ケアが必要であったため、在宅支援者を含めたカンファレンスを行い、自宅退院の運びとなった。

退院から数か月後、在宅支援者へモニタリングを実施。本人の病状は1ヶ月ほどで悪化した。本人の在宅療養に対する気持ちが強く、最初は在宅療養への不安が強かった母親の協力もあり、在宅療養を継続できていたとのこと。その一方で、家族の介護負担も大きく、穏やかであった印象の父親からは「こんなはずじゃなかった。」との発言もあり、実際の在宅療養の大変さを感じた。緩和ケア病院への入院が決まっていたが、入院前日に逝去された。

5. 考察

本事例では、A氏に対する意思決定支援の難しさを実感した。A氏の語りの中で、A氏が自宅や家族に対してどのような思いがあるのか、今後の過ごし方、生き方に対する思いなどを確認することができなかった。

併せて、支援介入中、本人と家族が顔を合わせて話をする場面がほとんどなく、退院前カンファレンスでもA氏本人の倦怠感の強さからA氏の参加は実現されなかった。

意思決定支援において、医療者側は本人の意思を尊重するため、本人のこれまでの人生観や価値観、どのような生き方を望むかを含め、できる限り把握することが必要である。また、本人の意思は変化しうるものであることや、本人が自らの意思を伝えられない状態になる可能性があることから、本人が信頼している家族等の者を含め、繰り返し話し合いを行うことが重要となる。

まずは療養の経過の中でA氏の意思を医療者側が十分に把握しておくことが重要であり、それらをA氏・家族間で表出できる機会の構築を促す必要があった。そうすることで、A氏・家族の意思決定を包括した支援を多職種で見出すことができたのではないかと考える。

6. おわりに

本事例を通して、人生の最終段階を迎える患者・家族にとって、MSWとして患者・家族双方の意向を代弁するのみでなく、それらを本人主体で家族・多職種へ伝えていく必要があると感じた。今後のソーシャルワーク実践においても、今回の事例で学んだ意思決定支援を活かせるよう努めていきたい。